大阪大学外国語学部ポルトガル語専攻の学生の留学状況

海外交流

Rogério AKITI DEZEM*, 鳥　居　玲　奈**

Study Abroad Trends Among Students in the Portuguese Language Program at the Faculty of Foreign Studies, Osaka University

Key Words: USP, Unicamp, Osaka University, Exchange, Portuguese Language

はじめに

本稿では、大阪大学が大学間学術交流協定を締結しているブラジルのサンパウロ大学（Universidade de São Paulo, 以後USP）とカンピーナス州立大学（Universidade Estadual de Campinas, 以後Unicamp）について概説したのちに、ポルトガル語専攻の学生がこれまでに両教育機関で行ってきた留学の実績に鑑み、指導に携わる立場としての見解を述べたいと思います。

USPとUnicampのあゆみ

USPとUnicampは、いずれもブラジルの教育・科学分野において最も大きな存在感を持つ大学であり、そのあゆみはブラジルの高等教育の発展に深く関わってきました。

前者は、1934年1月25日にサンパウロ州によって設立された公立大学であり、ブラジル国内における教育と研究の卓越拠点を形成する目的で創設されました。その設立は、20世紀初頭の教育制度の近代化にともない、諸学部を一つの大学組織に集約しようとする試みから始まりました。90年にわたる歴史の中で、USPは、医学、工学、人文社会科学、芸術、生物科学など多様な分野に特化した学部や研究所を州内各地に展開し、ブラジルのみならずラテンアメリカ全体において学部教育、大学院教育、そして科学研究の面で高い評価を得る大学へと発展しました。

一方、後者のUnicampは、法律上、1962年12月28日に設立され、1966年にサンパウロ州カンピーナス市でキャンパスの建設が開始されました。その発展は、産業化と技術化が進むブラジル経済の需要に応じて、教育と研究を統合した拠点として構想されました。創設以来、Unicampは、ブラジルにおける科学技術研究の主要拠点の一つとしての地位を確立し、バイオテクノロジー、工学、医療、理学などの分野で高度な専門家を育成し、国内外のイノベーションに大きく貢献してきました。

また、USPは、ブラジルの知的・政治的・文化的リーダーの育成に深く関わってきた大学としても知られ、多様な分野での知識創出の中心となっているのに対して、Unicampは応用研究との強い結びつきが特徴であり、国内外の産業界と連携しながら技術開発とイノベーションを推進しています。

学術的・社会的重要性の観点からも、両大学はその研究成果、社会への影響力、そしてブラジルの経済・社会発展への貢献によって高く評価されています。大学の社会連携活動、イノベーション協力、国際的なパートナーシップは、両大学の存在感をブラジル国外にも広げています。このように、両大学ともブラジルの高等教育システムの強化に重要な役割を果たしてきました。

大学間交流協定校への留学

大阪大学外国語学部ポルトガル語専攻の学生の多くは、2年次終了以降、ブラジルまたはポルトガルへの留学を希望します。ブラジルを選択する学生の大半は、大阪大学交換留学制度を利用して、上述したUSPやUnicampでおよそ１年間学びます。なかには、協定校以外の大学と自力でコンタクトを取って留学を実現させる学生もいます。これに対して、ポルトガルを選択する学生は、ほとんどがリスボン大学やコインブラ大学の「外国語としてのポルトガル

* Rogério AKITI DEZEM
大阪大学大学院人文学研究科外国語専攻

** Rena TORII
大阪大学大学院人文学研究科外国語専攻

語コース」に所属し、様々な国籍の学生と共にヨーロッパポルトガル語の文法やポルトガルの歴史・文学・政治等の授業を履修します。本稿では、以下、大学間交流協定校であるUSPおよびUnicampへの留学経験者に対象を絞り所見を述べます。

USPやUnicampが選ばれる理由は多岐にわたりますが、一番のポイントは単位互換制度が利用できることにあります。いずれも大学間交流協定校であることから、現地で取得した単位は、一定の条件のもと大阪大学の卒業単位として認定されます。これにより、帰国後の学習負担を抑えつつ就職活動にも専念できる点は、留学先を選定する際の決定的な判断材料となっています。しかしながら、単位互換という実利以上に、多くの学生は、ブラジル屈指の名門校で現地の学生と切磋琢磨することに、言語面、教育面、文化面において大きな成長を見出しているようです。とりわけUSPの場合は、サンパウロ市という巨大都市で生活することへの治安面での不安を抱きつつも、この点を前向きに捉えていると言えます。

サンパウロ州内のこれら2つの大学が選ばれる別の理由として、空路の利便性も挙げられます。サンパウロ市近郊にはグアルーリョス国際空港、カンピナス市にはヴィラコポス空港があり、いずれもブラジルを代表する主要空港です。本専攻語の学生の多くは、留学期間中、日本のおよそ23倍もの面積を有するブラジルの各地を訪れます。なかには、ブラジル国内にとどまらず、南米の様々な国や地域を旅する学生もいます。そのため、サンパウロ市やカンピーナス市に居住することにより、移動が格段に便利になります。

充実した留学生活を送るためには、住環境の検討も欠かせません。大学へのアクセスを優先するか、移動に便利な市街地を選ぶかは重要な判断要素となります。現地の公共交通機関は、利便性や定時性の面で日本とは状況が大きく異なるためです。いずれにしても、本専攻語の学生は、現地の学生と共同生活を送ることが多いようです。ここでの共同生活とは、ブラジルのポルトガル語でRepública（「ヘプブリカ」と発音します）と呼ばれるシェアハウスに近い居住形態です。通常、学部や学年の異なる学生たちが一軒家をシェアし、光熱費をはじめとする生活費を分担します。寝室は相部屋が一般的ですが、現地の学生と寝食を共にすることの意義は非常に大きいと言えます。語学能力の向上はもちろん、ホームシックの解消や異文化理解、さらには交友関係の拡大や生活費の抑制等、多方面での成長と利点が得られます。

ポルトガル語の習得といった観点からも交流協定校への留学は大きな意義があります。USPやUnicampでは、外国人向けのポルトガル語コースに加え、現地の学部の授業も履修が可能です。現地の学生と共に学術的な文脈で話される自然な速度のポルトガル語に触れる経験は得がたい貴重な機会となるでしょう。ただし、ブラジルの大学の授業時間は長く、日本の90分授業に慣れている学生にとっては適応に時間を要します。具体的には、60分を１単位とし、人文科学系の科目は1科目あたり2～4単位で構成されるため、１回の授業が2時間から4時間に及ぶことも珍しくありません。そのため、教員の話す速度や専門的な内容への理解、そしてこの長時間の講義に耐えうる集中力を養うことが留学初期の大きな課題となります。

おわりに

留学先を決める際、上級生の留学経験談が重要な判断材料になることもあります。時には教員の助言以上に、留学経験者の声やアドバイスが、学生の意思決定を左右することも少なくありません。そのため、私たち教員もブラジルやポルトガルから帰国した学生の協力を仰ぎ、彼らの実体験を交えながら、後輩たちが留学へ挑戦できるよう積極的に後押ししています。重要なのは、学術的意義にとどまらず、人生の糧となるこの貴重な機会を最大限に享受することに他なりません。留学先がブラジルであれ、ポルトガルであれ、自身の希望や学術的ニーズに最も合致した大学を主体的に選択できるよう、日頃から助言を重ねています。

なお、本稿の見解は、統計的な調査に基づくものではなく、10年以上にわたる留学経験者へのヒアリングを通じて得られた知見であることを申し添えておきます。